教育長定例記者会見 会見録

日時：令和6年5月14日（火） 13時30分～

場所：教育委員室

発表項目

- ・学校防災ボランティア事業の参加高校生を募集します
- ・新規採用者のスタート支援事業を実施します

質疑事項

- ・学校防災ボランティア事業の参加高校生を募集します
- ・新規採用者のスタート支援事業を実施します
- ・上げ馬神事について
- ・中教審の教員確保策の提言について

発表項目

○ 学校防災ボランティア事業の参加高校生を募集します

県教育委員会ではこのたび、若き防災リーダーを育成するため、能登半島地震で被災しました石川県能登地方にて、ボランティア活動による現地支援などを行う「学校防災ボランティア事業」の参加高校生を募集いたします。この事業は資料の1、本事業の趣旨にもありますとおり、三重県は近い将来南海トラフ地震の発生が危惧されていますので、大規模災害の発生時に自ら行動できる防災人材の育成を図ろうという趣旨で実施するものです。事業概要は、2のところにありますように、①の事前学習会、②のボランティア活動、③の事後学習会の3段階で行うこととしていますが、例年の事業内容から、かなり変更を加えたものになっています。大きな変更点としては、②の行き先です。これまで東北地方に行っていたのですけれども、今回、能登半島に変更いたしました。これは、能登半島地震の被災地での災害ボランティアのニーズがまだ継続する見込みですので、安全には十分配慮した上で、高校生に現地での支援活動を体験させたいということでこのようにしました。それから、この行き先変更に伴いまして、現地訪問の時期を、昨年8月だったのですけれども、これを11月上旬に変更いたしました。現地の被災状況をふまえますと、夏休み中に訪問するのはちょっと早過ぎるのではないかと思いますし、またその猛暑の中での活動となると、体調管理が難しいということもありますので、この日程といたしました。戻って①の事前学習会につきましても、これまでは津市内で1日座学の形で行っていたのですけれども、今回は夏休み中に、熊野市内で1泊2日の合宿形式で行うこととしました。防災食づくり体験や、寝袋体験なども盛り込んだ内容としています。次に②の能登半島地震ボランティアは、貸切バスによる2泊3日の行程で、ボランティア活動の内容は今のところまだ未定ですが、その時点の現

地のニーズに応じて、安全面に配慮のうえ決定することとしています。③の事後学習会・成果報告会は来年2月に津市内で行う予定です。裏面にいきまして、参加費用ですけれども、全日程の昼食代、飲料代、入浴代、県内学習会参加の交通費、さらには能登半島のときの貸切バス発着地までの交通費、貸切バスに乗ってからは無料なのですけれども、そこに行くまでの交通費は、参加者の負担ということになります。募集対象となりますのは、県内に所在地がある高校の生徒30名程度としています。

○ 新規採用者のスタート支援事業を実施します

近年、教員不足が大きな問題となる中で、採用されて間もない教職員がメンタル面の不調等を訴えて早期に休職、離職するケースが増えています。そこで、新規採用者が安心して着任し、過度な不安に悩まされることなく意欲的に子どもたちに向き合うことができるよう支援事業を実施いたします。まず、資料1の現状と課題ですけれども、令和5年度採用教諭へのアンケートによると、抱える悩みの上位は、「学習指導」74%、「学級経営」46%、「生徒指導」46%となっています。また、職務に抱える悩みや疑問が生じても相談することを消極的に考える人が23%いることもわかりました。そこで、こうした課題に対応するための2の取組内容のとおり取り組んでいきます。まず、(1)の「新規採用者の課題に焦点を当てた動画教材の作成・活用」ですけれども、これは新規採用者の課題に焦点を当て、新たに「メンタルヘルス」「マナーとコミュニケーション」「人権教育」「学習指導」「学級経営」の5つのテーマにかかる動画教材を作成します。これをどう活用するかというと、まず令和7年度採用予定者、これは来年度に採用する予定者ですけれども、この採用前研修、今年11月から開始するものなのですが、ここにこの動画を活用して、採用前から資質向上、不安や悩みの払拭、軽減を図っていくということです。もちろん今年度の新規採用者も活用できるように、8月以降順次配信していくこととしています。それから(2)としまして、研修での協議と交流の充実を図ります。教諭対象の初任者研修におきまして、新たに任意参加の交流会を年3回実施いたします。交流会では日頃の悩みや日常の中で感じること、挑戦していることなどを気軽に共有できる機会として運営いたします。これは受講者同士の自由な交流を中心とするのですけれども、特に大きな課題や重い悩みを抱えた受講者がみられた場合は、研修担当者がさらなる研修や支援につないでいこうというふうに考えています。この他、初任者研修全体を通じまして、受講者同士が日頃の実践等を交流する場面を多く設けてまいりまして、悩みを共有したり、アイデアを出し合ったりする経験をとおして意欲向上につなげてまいります。あと(3)にありますように、新任校長研修などの管理職研修などにおきまして、各職場における同僚性や若手教員への支援の必要性についての内容を強化しまして、新規採用者を支える職場環境づくりを進めていくこととしています。

発表項目に関する質疑

○ 学校防災ボランティア事業の参加高校生を募集します

(質) これまで東北の大川小学校とかを訪れたとのことですが、これまで何回ぐらい、主に
どこに行っていたのかということと、これ資料には大規模な地震発生時に自
ら行動できるとありますけれど、具体的に何を学んでどういうふうに南海トラフ対策
に活かしてほしいかとかありますか。

(答) まず、名前はともかくとして、東日本大震災の翌年から、学校防災交流事業という名
目で、三重県の中学生在が宮城県の中学生と交流する事業が始まっています。その後いろ
いろ名前が変わったりしているのですけれども、具体的には最近の状況ですけれども、
例えば去年でしたら、宮城県と福島県を訪問しています。一昨年、令和4年度は宮城県
を訪問しています。

(答 教育総務課) これまで東日本大震災の被災地ということで、主に宮城県を中心に訪問
してきました。大川小学校のような震災校において、そこで震災当時のことを現地の方
からお話を聞くということもしてきました。また、震災の復興住宅の方に伺わせてもら
って、そこに入っている住民の方と、足浴マッサージのような形で、ボランティアとい
う形で交流しながら、お話を聞くというような取組をしてきたところですよ。

(質) 2つ目、何を学んで持ち帰って活かして欲しいのかという。

(答) 実際の被災地で現場を経験することによって、災害が起こったときにどういった行動
が必要なのか、どういったことが求められているのかということを理解して、自ら進ん
で、いざというときに、地域の役に立てるような、そういう人材を育成していきたいと
思っています。

(質) 具体的に地域の役に立てるといえるのは。

(答) そうですね。例えば、自主防災組織なんかに入って、皆さんのリーダーみたいな形で
行動できるとか、そういう方々が地域で求められていますので、消防団とか、人材が今
不足している部分がございますので、そういうところにすすんで行動できるような、す
すんで入団していただけるような、そういう人を創っていきたく思います。

(質) 参加費は、一部参加者の負担になっているのですけれど、一人あたりどのくらい。そ
の事前学習から5,000円とか。

(答 教育総務課) 自己負担金は、会場までの交通費とか。

(質) 額でいい。事前学習会に一人あたり5,000円参加費とかあるでしょ。それを入れてい
くらぐらいになるのですか。

(答) 熊野に行く交通費がちょっと高いですね、こちらから行くからね。

(答 教育総務課) 住んでいるところによって、変わってくると思いますので。

(質) 集まって行くのでしょうか、人は。

(答 教育総務課) 事前学習会は現地集合です。

(質) いや、事前学習会はそうだけど、石川までも現地集合。

(答 教育総務課) 貸切バスまでの交通費ですね。訪問するときはそうです。

(答) 訪問するときはそうですね。ひょっとしたら、一番高いのは、事前学習会の熊野まで

の交通費ぐらいかな。

(質) 東日本以降でやっていて、予算化して参加者 30 名ぐらいなら、仮に 1 人 3 万だとしても、たかが 100 万じゃないですか。それからいけば当然、ボランティアで、要は人力使う部分もあるわけだから、現地のボランティアでね、単なる学習の面じゃなくて。だとすれば、本来公費で持っても、別に誰も文句言わないと思うのでね。そういう検討はなかったのですか。

(答 教育総務課) 貸切バス、三重県から出発する分については、当然出させてもらうのですけれど、そこへの交通費についていろいろ議論あるのですが、今のところはそれぞれで集まる場所まではお願いする感じです。

(質) いやだから、広島の前爆の日の派遣とか、市で全額持ちとか、広島なんか市でそういうものを全部持って、他県の中学生も招いたりしているわけで、そこからいくと積極策・消極策でいくと、あまりにも参加者に、しかも高校生、普通は実際働いていないじゃないですか。お金貯めるためにバイトしないといけないとかそういう馬鹿な話ないじゃない。だとすればそれは公費で持っても誰も文句言わないと思うが。

(答) おっしゃるとおり、去年までは津市内での事前学習会だったので、お金がかからなかったというのもあるのですけれども、今年お金がかかることになったのでそういう話もよくわかります。今回はもうこういう仕切りにしてしまいましたけれども、少し今後に向けては考えたいと思います。

(質) この日にちの設定 11 月 2 日から 4 日というのは、どういう形で割り出したのですか。夏休みでやってもいいのではないですか。

(答) 夏休み、我々も検討したのですけれども、まず私が一番思うのは、夏休み、まだ現地もなかなか混乱している状況もあるので、そんなときにいきなり行くのもどうかというのは自分の中にはありました。あと、検討の中で出てきたのは、去年も夏休みに行ったけれども、大変暑かったと。猛暑の中で体調管理に気を使う部分も多かったし、あと例年、台風との日程のやりくりが大変でして、去年も中止にしようかというふうな悩みもあったのですね。そういうのをいろいろふまえると、11 月の 3 連休がいいのではないかということで、今回こうさせてもらいました。今後に向けては、試行錯誤の中でやっていくので、ひょっとしたら夏休みにやったら参加できた人が、11 月だと手が上がりにくくなるかもしれませんので、そういうのも見ながら、今後しっかりと検討していきたいと思います。

○ 新規採用者のスタート支援事業を実施します

(質) 2 点質問させてください。まず 1 点目なのですが、令和 5 年度採用の教諭へのアンケートで、悩みの上位で、「学習指導」「学級経営」「生徒指導」と続くということですが、これ具体的にどんな声があったということをお聞きしたいのと、あともう 1 点、教員の悩み解消に向けた過去の取組とかがあれば、ぜひ教えてください。

(答 研修推進課) 新規採用者は、子どもの前に立って話をすること自体、慣れていませんので、非常に緊張しながら授業を始めているという状況です。それから、子どもたち同士をつないでいって、温かい学級を作っていくということについても、まだ、スキルが未熟であり、この点に関わっても、いろいろな悩みの声が上がっております。

(答) これまでの取組というか今現在の取組は、初任者の教諭とか養護教諭とか栄養教諭に対しましては、校内研修のための指導教員を配置しておりまして、校内で研修を実施したりして、指導教員が教諭の悩みに対応したりすることとなっていますけれども、さらに強化していこうということです。

(質) アンケートの結果の数字に対して、まず教育長としての受けとめ、感想を教えてくださいませんか。

(答) 新規採用者は、基本的に不安になりがちだと思っております、そんな中でも悩みは、やっぱり基本的なところが多いというのは感じます。授業をやるときの「学習指導」が一番、4分の3が不安に感じているということです、これが大きいのだろうと思います。それから「学級経営」ということで、いろんな問題を抱えたときにどうするかといったこととか、「生徒指導」の問題とか、おそらくこの辺りが気になるだろうということは、予想もできることかなと思います。その次の順位でいくと「特別な配慮がある児童生徒について」とか、「ICTの活用について」とか、「保護者対応について」が続くのですけれども、そういうことだろうという感想を持っています。

(質) あと資料の(2)のところ、今周囲に相談することを消極的に考えている方が23%ということですが、この数字に対する受けとめと教育長なりの見解として、なぜこう、およそ4分の1の方が、そういったなかなか周囲に相談できないというふうに考えられているのか、何か考えられる要因みたいなものがあれば、教えてくださいませんか。

(答) この23%の数字は「どうしても相談しなければならないことだけ相談している」「あまり相談していない」とかそういう回答の合計ですけども、4分の3の人は、一定悩みがあれば相談できるということなのですけども、最近の若い方は、なかなか声を上げられない方も多いのかなと。私も現場におりましたけれども、おとなしい教員が結構増えておりますので、コミュニケーションに積極的になれない教員が、一定数いるのかなという感想ですけども。

(質) この現状の課題の(1)の74%の「学習指導」と回答した、まず悩みがあるかないかで、聞いたのですかね。その母数というのをちょっと教えていただければ。

(答 研修推進課) 初任者全体に対してアンケートを実施しました。その時に回答したのが302名です。聞き方としましては、「これまでにどのような疑問や悩みがありましたか」という質問をしています。複数回答可です。その悩みの選択肢として、「学習指導」とか「学級経営」「生徒指導」等の項目が挙げられているという状況です。

(答) 教諭が対象のアンケートなので、昨年度、新規採用教諭443名です。

(質) あと、この動画制作費はいくらぐらいなのですか。

- (答) 250万ぐらいです。
- (質) どういう形態で、要は、作る時はどういう形で。一般で求めて、それとも決め打ち。
- (答 研修推進課) 委託をさせていただきます。
- (質) 一般競争。
- (答) はい。一般競争入札です。
- (質) 県内業者ですか。
- (答 研修推進課) そうです。
- (質) 初任者は、こう純粹に1年目ということですから、その1年間の初任者ですか。
- (答) そうです。
- (質) アンケートは、小中学校も含めて。
- (答) はい。小中学校も含めてです。
- (質) 公立小中学校ですね。あと高校。
- (答) 小中、高等学校、特別支援学校。
- (質) 私立は入ってないわけですね。その中の1年目だったら、どなたでも不安であるだろうということは、当たり前なことなのかなと思いますけど、今この時点で強化しなければならぬという、それからなんかこう直接のきっかけ、例えばアンケートが、経年でどんどんこう不安抱える人が増えているとか、人手不足が背景にあるにしてもこのタイミングでこれを強化しようというのは、何か。
- (答) 昨年度新規採用者の1年後をみても、三重県の新規採用者で9名が離職しています。そういう形で、せっかく教員になられたのに、辞めていかれる方も出ておりますので、そういうことを防ぎたいというのは、我々としてこの教員不足の中で、そういう思いは常に持っております、今回、何とか予算を獲得できたので、やっていこうということです。
- (質) この人数の離職は、近年ではかなり多い部類ですか。
- (答) そうですね。ちょっと申し上げますと令和4年度は11名、令和3年度は4名、令和2年度は4名という離職の状況です。
- (質) この数字というのはやっぱりここ数年というのは、目立っている。
- (答) そうですね。目立つというほどではないかもしれませんが、9名、11名というのは、やっぱり何とか止めたいとは思いますが、離職までいかななくても、休職される方の話も聞いていますので、そういうところも防いでいきたいと思っております。
- (質) 指導教員を配置して初任者の方をサポートしてきたということ以外で、近年で何か強化したりとか、そういうことはしてきましたか。
- (答) そうですね。他県では担任を持たさない県とかがクローズアップされていますけど、うちの県は担任を持たせないというところまでいかないですけども、これまで普通に担任を持たせていたところも、担任を一旦避けようかという動きも出始めているという感じです。小学校だとなかなか定数に余裕がないので、新規採用職員だからといって

担任を持たさないということはなかなかしにくいのですけれども、そういう中でも、加配の教員なんかを利用して、今教科担任制なんかも拡充しつつありますので、担任を避けるということも若干可能にはなっておりますので、そういう動きは出始めています。

(質) 県内でも。

(答) そうです。

(質) これは多分正規の新規採用教員だと思うのですが、いわゆる臨時教員でも、多分採用試験に落ちて、だけど臨時で取られたという先生もいると思うのですが、そういう人に対しても同じような指導をしているのですか。

(答) いえ、今回の発表は正規の教員だけの話です。

(質) いわゆる臨時教員でも1年目の人はいると思うのですが。

(答) 臨時教員に対しては校長が学期に1回ぐらいの割合で研修を校内ですということにしておりまして、校長に委ねている部分がございます。

(質) これビデオを見せるようにするとかという考えはないのですか。

(答) 今のところ、そこまでは考えておりませんでしたけども、検討の余地はあるかなとは思っています。

(質) そもそも校内研修のための指導教員も臨時教員1年目の人に対してはついてないのですよね。

(答) そうです。

(質) アンケートの件ですけど、そもそもこの新任の人たちはどういう悩みが最近増えてきているのですかね。これまでないような悩み、最近ならではの何かあるのかなと思っています。

(答 研修推進課) こちらでは今具体的なことはご説明ができません。

(質) 離職した人はなぜやめたと言っているのですか。

(答) 具体的にどこまで聞き取れているのかというのはあるのですが、理由がわからないものもありますし、なかなか私には向いてなかったという話も聞きますし。

(質) それは昔と変わらない。

(答) そうですね。ただ最近多くなっているのは、転職という話はよく聞きますね。人材が流動化しておりますので、それは新規採用職員に限らず、若手職員が転職して別の職に行くという話は昔よりはよく聞きます。

(質) 期待して入って先生になったけれども、案外面白くなかった。

(答) というのがあるかもしれない。

(質) そういうふうに感じてらっしゃる。

(答) そういうことがあるかもしれないと思います。

(質) 相談のところでですけども、周囲に相談することを消極的に考える者と、最近の先生はあまり周囲に相談することがない、減ってない。

(答) いや、自分の印象ではそんなに昔と傾向が違うとか、そういうことはないのではない

かと思うのですけれども、おそらくですけども、いつの時代も一定割合の方が、相談しにくい割合が存在するのではないかなと思っていて、その人が相談しやすい環境を整えていくというのが我々の1つの重要な責務ではないかなと思います。

(質) 内にこもる人が増えているという印象があるというわけではない。

(答) そうですね。一定そういう傾向はあるかなとは思いますが、教員になる人がそういう傾向かどうかまでは掴んでいません。

(質) 退職者の数を先ほどお話しされたと思います。やや増加傾向なのかなというふうに感じました。休職者は現時点でどんな感じですか。

(答) 全国的な傾向は増加傾向にあたりしますよね。

(質) なるほど。例えばですけども、退職される前に多分途中で休職するとかということを選ぶ人もいるかなと思うのですが、そういったところへの支援とかというのは。

(答) メンタルヘルス系の支援も力を入れてやっています。いろんな方、医者へ相談をしたり、復職時にいろんな制度を設けたり、メンタルヘルス系の事業もさまざまに整えています。職員が病気になったときに、管理職が相談できるような窓口なんかも作っておりますし、復職するときの支援制度なども作っているということで、メンタルヘルス系の仕組みというのは結構前から整えてあります。

(質) そういった制度を整えたことによって、何か改善の傾向とか見られたりしたのですか。

(答) 一定救われる職員はいますけれども、全国的には精神的に苦しい状況に陥る教員の数というのは減っていないのです。ただそういう制度が、効果がなかったとは言い切れないとは思いますが。

(質) 今、公立の小中高とかで、何人ぐらいの人が教員不足ですか。

(答) 教員不足の数ですか。この4月1日の文部科学省の定義による教員の不足数は、小中学校で11名、県立学校で1名です。

(質) 三重県の話ですか。

(答) 三重県です。

(質) 合わせて12人が不足している。

(答) 文部科学省の定義によるとそうなのです。ただ、現場は不足感をもっと大きく抱えています。例えば高校なんかですと、文部科学省の定義は、定数に非常勤職員でそれを埋めても、それは埋まった、欠員ではないと判断するのですが、実際非常勤職員でその定数を埋めても、非常勤職員は部活の顧問もできませんし、いわゆる校務分掌という進路指導担当とか生徒指導担当とか担任とかできません。できるのは授業だけなのです。授業部分だけで埋まっても、あとの部分が非常に困るということで、今申し上げた数以上に、現場は不足感を抱えています。

(質) 今年からこういう新しい取組を始めるということで発表されたのですが、改めて教育長のこの事業に対する意気込みを教えてください。

(答) 教員不足という問題は、現場では何よりも大きな問題だと思っています。1人でも不

足すると、他の教員の負担がものすごく増えてしまいますし、子どもたちへの影響も大きいので、それを防ぐための方法は知恵を結集してできることは何でもやるということでやっていかななくてはならないと思っております。今回の初任者に対する支援も「できることは何でもやる」の1つで、我々もしっかりと新規採用された職員が悩むことなく、現場に定着して活躍していけるよう努力していきたいというふうに思います。

その他の項目に関する質疑

○ 上げ馬神事について

(質) 今月の下旬に、上げ馬神事が改善してから初めて行われたということで、これまで壁を取り払うだとか安全策を講じた中での開催というふうになりましたけれども、教育長として、文書はすでに出されたと思うのですけれども、改めて感じられたことなど、コメントしていただけないでしょうか。

(答) 私どもから前に出した勧告は、3つあって、1つ目は動物愛護の遵守、2つ目として人馬ともに安全な神事の運営、3つ目が神事の実施主体の明確化ということでガバナンスを利かせて欲しいということだったわけですが、この勧告の回答に合った対策がしっかりなされているなというふうに我々は考えておまして、安全な神事が実施されて、今回、非常によく考えていただいたのではないかという印象を持っています。

(質) 今回安全に、上げ馬神事をやられたということではあると思うのですけれど、一方で何かこう、今後に向けて改善しないといけないことだったりとか、そういったお話とかは教育委員会さんの中では何かありますか。

(答) ちょっと耳に入っているのは、2日目に落馬があったということです。ただ、特に怪我がなかったということで、こういった件については、今後の対応のためにしっかりと1つの教訓として、考えていくようにしたいと思っています。

(質) 上げ馬神事の話ですけど、先ほど教育長から安全な神事が実施されたというようなお話がありましたけれども、勧告も出されていて、今回視察をされてということだと思うのですが、今後は県教委の動きとしては、何かやられることがあるかというのはどうでしょうか。

(答) 今回の勧告に、実際にこれで応えていただいたのかどうかというのは、正式には文化財保護審議会ですっきりと議論をして、勧告に対応していただいたかどうか評価したいと思います。この形で我々としては、文化財としての価値を維持しつつ、動物愛護の精神が遵守され、しかも安全にやっていただくということを期待しています。もうそれさえしていただいたら、我々として、特に何も申し上げることはないと思います。

(質) わかりました。ありがとうございます。

(質) 実際開催し終わった後、県に対して外部から意見とかというのがありましたか。

- (答 社会教育・文化財保護課) インターネットでご意見等はいただいて、神事については一部飲酒が見られた、鞭が使われた、細かくそういった指摘もありまして、基本的には神事を休止すべきではないかというようなご意見等もいただきました。
- (質) 何件あるか分かりますか。
- (答 社会教育・文化財保護課) そんなに多くはないのですが、掴めている分で10件以内です。
- (答) 教育委員会への意見もあれば、医療保健部へのご意見もあるということです。今は教育委員会に対する意見を出していただきました。
- (質) 実際に飲酒とか鞭の事実があったのですか。
- (答 社会教育・文化財保護課) 我々が現地で確認させていただいたときには、確認はできなかったのですが、そういった声もあったというのは聞いております。
- (答) 教育委員会としては、未成年の飲酒さえなければという思いはあります。絶対にお酒を飲んだらいけないのかというのは、ちょっとコメントを私どもはしにくいところで、安全に影響があってはいけないと思いますので、その辺は現場が、しっかり判断しなければならぬ部分かなと思います。
- (質) 鞭とかとなってくると、やっぱり勧告の中の動物愛護とかに抵触してくるのではないのですか。
- (答 社会教育・文化財保護課) 鞭も、これまで使っていた硬いものから、もっと柔らかいものにしたりとか、進行方向を指すような使い方をするとか、基本的には、指導の方がおっしゃっていましたが、それを守られていたと思うのですが、我々も鞭が使われているところを生で見たわけではないのですけれども、いろいろな方の声を聞くとおっしゃっていたということです。
- (答 社会教育・文化財保護課) ちょっと補足させていただきます。今回の上げ馬神事の際には、あり方検討会で専門家の方も入って、鞭の使い方等については事前に定めてあったところでした。今回はもう、全力で駆け抜けられないということでしたので、合図鞭という形で使うということを取り決めていたのですが、当日はどうしても、早く登りたいというようなこともあって、お尻にも鞭を使ったということは、実際にあります。ただこれは動物愛護の、馬の愛護に反するような使い方ではなくて、実際に乗馬のときに使われるような使い方なのではございますけれども、事前に示し合わせたところで合図鞭だけと言っていたので、2日目のときにはもうそういう鞭を使わないで、実施したということになっております。
- (質) 1日目は申し合わせみたいなので、合図鞭以外で使わないようにしようとしたのだけど、お尻に使っていたということ。
- (答 社会教育・文化財保護課) はい。
- (質) あと、もちろん未成年飲酒は論外ですけど、酔っぱらって乗馬をするという行為自体もないのですか。

(答 社会教育・文化財保護課) それはいいです。

(質) それもないことは確認しているのですか。

(答 社会教育・文化財保護課) はい。実際にその中に入られる、馬のいるところに携わっている方についてもそういうことは一切してしないというところだったのですけれども、それ以外の神事関係のところでの飲酒という話はある、それはどうなのかというような意見は聞いています。

○ 中教審の教員確保策の提言について

(質) 昨日の中教審の部会で、教職調整額が 10%に引き上げるのが待遇改善になるとか、あとは若手をサポートする中堅ポストの新設とか、あとは残業過多の是正みたいなことが提言で出されましたけれども、学校の先生のなり手不足だったりとか、それから残業過多だったりとか、いろんな問題が全国的にある中で、今回の提言内容は教育長としてどう感じるか。

(答) まず、この中教審の中で、教員の処遇改善を真摯に検討いただいて、約 50 年ぶりの調整額アップのような形で、こういう画期的な対策を打ち出していただいたことに心より感謝申し上げたいというのがまず一番の感想です。働き方改革に本当につながるのかという論調も各紙記事なんかでも見受けられたのですが、私は働き方改革にはつながらないとは、一概に言えないと思っています。例えば、今回の中には、勤務間インターバルの導入ですとか、小学校の教科担任制の拡充なんかも含まれておりまして、これなんかは一定の働き方改革につながる取組ですし、それから一番有効な手段は何と云っても定数を増やすことなのではございますけれども、我々もそれを期待は今後もするのではございますけれども、今この教員不足の折に、定数ばかり増やしても、結局その欠員が増えるだけなのではないかなという懸念もあります。やはり、この教員の人気を回復するという部分に目を向けていかなければならないはずなので、こうやって処遇を改善することに着手する、しかも国を挙げてそれに着手するということになれば、若い方にも期待感、教職に対する期待感も高まっていくと思いますので、大きく見ると、教員不足の改善とか、働き方改革には必ずつながっていくものではないかなと思います。まだまだ十分ではないかもしれませんが、かなり思い切ってやっていただいたなというふうに思っています。

(質) 現場の先生から、これに対する、例えば、10%の教職調整額引き上げとかは、以前から議論されていましたが、結構期待の声とか教育委員会に寄せられていたのですか。

(答) それは人それぞれの意見を聞きますね。確かに 4%が 10%になったところで、残業時間になると 20 時間ぐらいの話で、どこまで意味があるのかという人もいますし、いやいやこれは本給が上がるのだから、非常に大きいのだという方もみえます。ただ、皆さんが共通して言っているのは、やはり教員の場合は、どこまでの範囲が時間外として

認められるかというのは、なかなか判定しにくいということです。

以上、14時11分終了